草の芽句会だより

NO,166
22 6,2

断捨離を終えたる部屋に青葉風　文子
鍵渡し万緑の家去りにけり

連れ立ちて日傘の巡るお城かな　貞子
天守よりクレーン高し夏の空

戻り来て燕するりと軒くぐる　節子
手にいっぱいあじさい抱え友来たる

声あげて走れる幼黄蝶舞う　純子
草叢の夏アザミの色映ゆる

師の句碑に若葉の影の揺れており　範子
夏木立笑い声して友と知る

濠沿いを若きひとりの夏遍路　禮子
休耕田葵の花の色楽し

青萱の風に葉擦れの音静か　剋子
夕暮れの庭十薬の花あかり

大手門くぐれば初夏の朝の風　芳子
我が狭庭木々に花に小鳥くる

出席者　大黒　川原　氏家　森　吉崎　馬場　小山
投句者　小林

よいお天気である。緑濃い城山は、梅雨入り間近とは思えぬ程澄みきった青空。売店にはおじさんグループがベランダを占領しコーヒータイムを楽しんでいる。石垣工事のクレーンが二基、空を突き刺すように高く延びている。いつもの径には夏アザミが丈高く咲いて、濠沿の合歓はたくさんの蕾をつけている。毎年この時期の変わらぬ風景に心落ち着く気がする。

足を痛めて半年以上も句会に出て来られないⓎさん。「行かれんようになって思うんやけど［草の芽］はホントええ仲間やなあ。何十年も楽しませてもろて人生の宝物や。みんなに会いたいんよ。お城も歩きたいわ」と。平均年齢はもう八十歳？？運転には細心の注意をし医者通いも欠かせない。みんな少々の無理をしながら、それでも心許せる友とのひと時を大切に、好きな句作りを続けたいものと、切に願っている。